学長インタビュー No.14

「フェニックスフェスタは及第点」と語る原田学長は開口一番「図書館の充実を！」

十二月一日、越智広報委員長と吉田広報委員が学長インタビューを行った。今回は雑談風に。

広報委員＝（質問しようと身構えたら）

学長＝吉田さんは図書館の方だから図書館のことから話そう。

いつも言っていることだが、図書館には一層がんばってもらわなければ困る。ハードがすばらしいものになったのだから、それに見合う仕事を考えなければならない。つまり、学内の情報拠点であるばかりでなく、これからは学外いや世界に情報を発信する拠点にもなってほしい。

特に広島大学は、平和研究のメッカでもあるわけだから、インターネットを介してその情報を世界へ向けて提供する義務がある。

要するに、図書館は二十一世紀の広島大学の頭脳だ。そんな自負を持ってほしいということだ。そのためにも図書館学を職員の皆さんに極めてほしい。どんどん勉強しにでかけてその成果を図書館業務に生かしてほしい。

図書館としても情報の発信基地として動き始めておりますので、御支援ください。さて、フェニックスフェスタが終わりましたが、印象や気になったことなどお聞かせください。

何といっても、シュミットさんの講演がすごくよかった。私はシュミットさんの話の迫力に涙が出てくるほど感激した。このフェスタで私は、普段以上に忙しく過ごした。参加できるイベントにはできるだけ顔を出した。フェニックスコンサートでは歌ったし、国際シンポジウムでも話をした。各学部の展示はすべて回った。農場では肉を食べた。茶道サークルではお茶もいただいた。

そういえば、学生の催しでゴルフのスウィングをコンピュータで診断してくれるところがあり、プロの域だといわれて大いに喜んだ。おせじでもうれしい。

植樹のこともいっておきたい。フェスタの機会に、市民の皆さんの寄付で桜の木を八十本、総合科学部の近くに植えていただいた。運動公園には各学部の樹が植えられた。ぜひ見ておいてほしい。それから来賓がすばらしかったことにも言及しておきたい。名誉教授をはじめ文部省、財界、政界そして同窓会などからもたくさんの方々がかけつけてくださった。ありがたいことだ。

イベントに参加してみてわかったことが一つある。あたりまえのことかもしれないが、本学が大きな大学だということだ。国際シンポジウムもやろうと思えばできるし、地域の方々とのスポーツ交流からアカデミックな行事までなんでも実現することができる。

いろいろなイベントに出かけたためか熱が出て、結局三日間寝込んでしまった。朝晩点滴を続けてコンサートに出たが、ちゃんと歌えたから立派なものだ。一昨日の教職員のプロムナードコンサートでも学生オーケストラをバックに歌った。「帰れソレント」や「グラナダ」などだ。

ただ、反省点もみえてきた。大学人は宣伝が苦手だという点だ。確かにやることに意義があるが、でもやるからにはできるだけ多くの人に見てもらおうという意識も大事だと思う。お祭りなのだから参加する人が多ければ多いほどいい。このことは、今後の課題として是非解決したいものだ。五十周年の記念行事にそれを生かし、もっともっと大きなお祭りであってほしいと考えている。

そのためにも立派な講堂がほしい。これがないことも今回の反省点の一つだ。実はその予定地はもう考えており、将来少なくとも千人は入れる講堂ができればいいと考えている。

でも、今回のフェスタが及第点であることに変わりはない。まだまだ不十分とはいえ広大意識も深まったし、また大学と地元とが結びついた意義ははかりしれない。とりわけ、青年会議所のような東広島の若い人たちが本学に熱い期待を寄せてくれるようになったことは、とても喜ばしい。本学はそれに応えなければならない。

最後になりましたが、紫綬褒章おめでとうございます。

本学の皆さんにお礼を申し上げたい。先月十七日にその伝達式があり、皇居で天皇陛下に拝謁を賜った。今年度の紫綬褒章の該当者は二十七人で、うち十二人が研究者だった。その中に国際シンポジウムの座長を務めていただいた石井米雄先生がおられて楽しかった。臨床の研究者がいただくことはめずらしい。私の領域、耳鼻咽喉科学でも、これまで二人くらいしかもらっていないようだ。昨年のバラニー・ゴールドメダルの受賞が評価されたのであろう。